

新山城地域振興計画策定懇話会

第 1 回全体会での主な意見

- ・ 日 時 平成 30 年 11 月 9 日（金） 16:00～17:30
- ・ 場 所 宇治総合庁舎大会議室
- ・ 出席者 大西座長、北川委員、小山委員、白須委員、高山委員、藤野委員、松中委員、森委員、森本委員

(子育て、介護)

- ・ 保育所だけではなく、地域で助け合う仕組みづくりを再構築していくことが必要
- ・ 80 代後半の親を持つ 50～60 代に介護離職が増えており、介護を終えてからの再就職が課題

(産業)

- ・ 山城では農業も法人化などで活気があり、頑張っている若者もいるが、稼げないについてこないし、辞めてしまう。農業発展のためには新規就農で食べていけるようにすることが課題
- ・ 地域経営（地域内でお金が落ちること）がキーワード
- ・ 地域ごとの個性を出しつつ、京都市や阪神・中京圏とネットワークにより、新たな発展に繋がる。
- ・ 誘致した新しい企業とのネットワーク構築により既存企業の活性化に繋がる。
- ・ 今ある強みを活かす、域内循環を促進すること、人手不足への対応が課題
- ・ 学研都市の世界最先端施設が地域内に活かされておらず、A I ・ I o T で最先端の地域づくりに活かさないか。

(相楽東部の未来づくり)

- ・ 真の意味での地域活性化に繋げるためには、収入だけでなく、高齢者がいきいき働くことが重要
- ・ 相楽東部でスポーツ観光を進めていると思うが、誰が主体になるかが一番の問題で、基盤をどのように作るかが課題
- ・ 地元農家が農作業に充てるべき時間で農産物を運んでいる現状があり、農業振興には物流の視点も必要

(防災)

- ・ 少子高齢化によって、防災施策は地域福祉そのもの、防災も地域包括ケアの一部と感じている。孤立すると Q O L が下がり、福祉的にも防災的にもマイナス要因で、助けるべき人が増えてしまう。

(地域づくり)

- ・発展する地域と少子高齢化が進む地域、光と影といった特徴があり、いわば日本の縮図。育った子どもが成長すれば地域外に出ていく現実を目の当たりにして、シビックプライドの必要性を感じている。
- ・地域内循環の活性化、相互補完、人材交流も重要
- ・地域の持続性や将来を見据えた視点、地域の歴史を踏まえた視点も必要
- ・これからの世代にも魅力が伝わるメッセージを計画に入れるべき
- ・多様性にはソフトインフラが大事。人がいる前提でつくられた分業、タテワリのシステムが残っているが、こうした壁を壊し他者を受け入れることを進めることが必要
- ・多様性の受容に向けたソフトインフラ（人材や仕組み）構築のため、情報やデータを活かすネットワークづくりを進めることが重要
- ・オンライン講座等のICTを活用することにより住民のアクセス機会を拡大できる。
- ・地域に一体感がなく、ダイバーシティ(子育て、多文化共生)を前面に押し出して、地域をまとめ上げていくことが必要
- ・トライアンドエラーを気兼ねなくできる地域であれば人を集めるきっかけになる。
- ・交通網が整備されても、ストロー効果でむしろ人口減少する現状があり、「ここで暮らしたい」という地域の魅力を高めるべき

地域のくらしづくり分科会での主な意見

- ・日 時 平成 30 年 11 月 26 日（月） 14:00～16:00
- ・場 所 宇治総合庁舎第 3 会議室
- ・出席者 藤野分科会長、高山委員、森委員、森本委員

(子育て支援)

- ・ママ友等、横の繋がりから情報が入りづらい父子家庭の支援が必要
- ・子の年齢や状況によってニーズの違いがあり、現行の子育て関連制度で対応ができていないか検証が必要
- ・幅広い制度利用に向け、ショッピングセンター来場者にPRする、LINEアプリを活用するなど活用しやすいアプローチの検討や、そもそも子育て関連の制度を活用していない人への目配りも必要
- ・誰もが保健所に連絡するとは考えられないため、顔の見える関係づくりができる人的プラットフォームの構築を打ちだしてはどうか。また、基礎自治体を最初の窓口にするなどの工夫はどうか。
- ・コミュニティナースのような形で地元に入れば行政も子育て現場の状況が把握できるのではないか。
- ・フランスでは全土に保育アシスタントを配置したことが出生率改善に繋がった。当事者同士が緩く支援しあえる仕組みがあればよい。
- ・生まれてからの子育て支援だけではなく「婚活・妊活」を含めた切れ目のない支援が必要
- ・少子化対策として、学生に「子育ては幸せ」ということを伝えることが重要
- ・子育てを地域でシェア、夫とシェアすることが母親のプレッシャー軽減のために重要
- ・最近の若者は、人付き合いが不得手。人との関わりをどう学ぶかの視点が必要
- ・専門的スタッフがない地域では子育てが難しい。都市部と郡部の違いを踏まえた二段構えの施策が必要

(相楽東部の未来づくり)

- ・埋もれている資源を発掘し、お金が循環する仕組みを作ることが必要
- ・スポーツによる地域振興は評価できるが、単なるイベント型で終わらせず、地元の人々の興味関心・参加を得て、草の根の地元人材育成とセットであることが重要
- ・地元の人、特に子ども達への競技普及とインストラクターや運営を地元の人ができるようにする中間支援的仕組の構築が必要
- ・ハード整備してイベントを行って終わりではなく、その先を考えた仕組みづくりをお願いしたい。
- ・行政はイベントをよく無料にするが続かない。地元のプレイヤーがどう関わるか、DMOとの連携など次の仕組みをどうするかを考えることが必要
- ・空き家を所有する住民が本当に戻ってくるのかを見極めてアプローチすべき
- ・都市部と農村部の最大の格差は、教育と医療。教育を理由に学研など都市部へ流出しているなら、教育が一段落した頃には医療が必要になり、結局農村部へ戻ってこないのではないか。

- 地域で就農してくれる等の前提条件なしに移住者に「とりあえず住んでもらう」のも一案ではないか。
- 「こういう人なら空き家を貸してもいい」と住民の意識も変化しつつある。地域の求める人材はどのような人かという視点も必要

地域産業・地域活性化分科会での主な意見

- ・日 時 平成 30 年 11 月 27 日（火） 10:00～12:00
- ・場 所 宇治総合庁舎第 3 会議室
- ・出席者 白須分科会長、岩本委員、北川委員、松中委員、森下委員、森本委員

(産業振興)

- ・東部丘陵地は、歴史的経緯をプラスに考え、緑を活かした工場、物流拠点地帯という考え方が面白いのではないかと。木津川左岸地域は、関西企業に限らず、BCP（事業継続計画）という視点で首都圏など広域からの誘致を図るべき
- ・宇治、久御山、向日、長岡京地域は、育った企業が流出しない魅力づくりが重要。用地がなければ木津川左岸へ誘導すれば域内循環の理想にも叶うのではないかと。
- ・産業立地を優位に進めるためにも、防災に対する備えを進め、セットでPRしてはどうか。
- ・企業誘致にあたって、首都圏のバックアップ機能として安心安全をPRできるよう、その機能を押さえておくことも必要
- ・企業誘致は、既存企業とのシナジーの視点も必要
- ・京都市からの目線だけでなく、名阪奈、隣県域との関係も入れ込むべき
- ・人手不足をも補う技術革新の推進は方向性として歓迎
- ・高齢者を重要な人的資産としてどのように活用するか、という視点も必要
- ・人材確保へ向けて、住む場所としての魅力を高めることも重要
- ・農地が産業用地に転用されていく中、農業を続ける難しさを感じる。どこに農地を残すのか等、広域的な役割分担を考えることも必要
- ・ものづくり、農業ともに、いかにして若者に魅力を伝えるかが課題
- ・学研都市のインフラは東西交通がボトルネック。国道 163 号以外に、「精華大通り」の奈良県側延伸等、東西のキール（骨格路線）を整備いただきたい。
- ・例えば「高温でも色が変わらない抹茶」の技術が欲しくても一企業が探すのは至難。マッチングに取り組んでいただきたい。
- ・八幡宮や平等院といった特定スポットでなく、京都府南部一体としてのアピールが重要
- ・相楽東部は都市から近い田舎であることが強み
- ・行政HPはなかなか閲覧されないの、発信主体、発信手法については工夫が必要
- ・外国人ターゲットならJR、レールパスなど既存のシステムの活用を前提として考えることが必要
- ・修学旅行生の受入れについては、京都から日帰りでは出来ない、価値ある体験（学研・農）を作り、宿泊してもらうことが重要
- ・茶畑観光の旬は短く、繁忙期の受入れは茶農家への迷惑もあり、何が挑戦できるか、地域住民と丁寧に議論することが必要
- ・地域のやる気次第ではあるが、夜の観光をどうするかも課題であり、上手くいけば京都市域に対する強みになりうる。

(農業振興)

- ・法人化で年収1億を目指す人若者がいる一方で、高齢零細農家、ノウハウのない新規就農者に分化
- ・農業は3Kというイメージがあるが、機械化で簡略化・稼げる農業への変化もみられる
- ・茶も、プレミアム化と二番茶三番茶を含めた収益体制の構築が重要
- ・ジビエ利用では、獣害対策だけでなく、山間部の農地利用とセットで考えるなど総合的な視点が必要
- ・農業経営を考えて農業をしている人は少ないので、各政策メニューをワンストップで提供するのはいかがでしょうか。
- ・新規就農者、既存農家、法人化等で成功した農業法人の三者それぞれの状況に応じた施策が必要
- ・6次産業化の影響で、茶の販売業者は減少しており、スイーツやペットボトルなど差別化を進める必要性が高まっている。
- ・オリンピック、万博への食材提供にはGAP(農業生産工程管理)が必要
- ・「京都ブランド」は強いので、メディア戦略を含めて、レバレッジを生み出す方法を考えることが必要
- ・農業と観光は親和性があり、「京やましろ新鮮野菜」などブランド化の取組は促進すべき。
- ・新規就農者の定着率は低いので、農家の子弟が農家を安心して継ぐことができる状況を作ることが農業就業者維持の近道になるのでは
- ・林業についての言及も必要
- ・農家にロボットを導入するといった農商工連携も考えられるのではないかと。